



学校法人
鎌倉女子大学

学園主・松本紀子先生の米寿をお祝いする会

学園の母として敬愛されている松本紀子先生の米寿をお祝いする会が、暖かな早春の建国記念の日のお昼時、ヨコハマ・グランド・インターコンチネンタル・ホテルで華やかな雰囲気の中に開催されました。

先生は、大正13年、当時の紀元節の日に、東京帝国大学教授長井真琴博士・常子夫妻の四女として東京駒込で誕生され、この日2月11日（土）、満八十八のお誕生日を迎えられました。紀子という名は、この祝日の名に由来するということです。

長井博士は、わが国の仏教学の先駆者で、その門下から文化勲章受章者を輩出するなど、後に斯界をリードする多くの研究者が巣立っていきましたが、特にインドの古語（サンスクリット語、パーリ語）を得意とする方でした。戦前よりNHKのパーリ語のラジオ講座を担当したり、戦後は本学で教鞭をとられたこともありました。松本講堂には博士の書を写したレリーフがかかげられ、また図書館には長井真琴文庫がおさめられています。

因みに、米寿の「寿」という言葉は、そのサンスクリットの「アーユス」の訳語として仏教と共に中国、そして日本へと流れ来た言葉で、他のインド・ヨーロッパ語族には見ることが出来ない「永遠のいのち」という意味が、その一字の中にこめられています。

当日は、田中慶秋衆議院議員、浅尾慶一郎衆議院議員、中村省司元神奈川県議会議員、他大学の学長先生方、ご友人の方々を初め、紀子先生が日頃親しく交際している学内外の関係者およそ140名を超えるにぎやかな集まりでした。

本学理事（北海道文教大学理事長・学長）の鈴木武夫先生の発起人挨拶、誠之小学校から家政学院までの同窓生のテレビでおなじみ料理研究家の城戸崎愛様のお祝いの言葉、本学理事（清水建設代表取締役会長）の野村哲也先生の乾杯のご発声で始まった午餐会は、紀子先生の誕生から今に至るスライドショー、音楽科の先生方や紀子先生の生涯学習センター講座「音楽の森」に参加する方々による演奏や合唱、そして参加者の全員合唱と和やかに進み、紀子先生の甥で元朝日新聞「アエラ」編集長の蜷川真夫様のお礼の挨拶、東京府立第二高等女学校時代以来の親友のお一人で、かつて本学の理事を務めて下さった大橋進元最高裁判所判事夫人の大橋左代子様の激励の言葉で結ばれました。

会をしめくくる頃、再びマイクをもたれた紀子先生から、東に大船キャンパス、西に観音さまを望めるご自宅から、今は亡き尚先生、ご両親、学祖夫妻、そして人生でめぐり逢った大切な方々を偲びながら毎日を送っていることが語られ、静かに歌い出された「遠き君を想ふ」の独唱に、参加者一同は、深い感動につつまれました。

夕日山に沈みて 黄昏せまる頃

ここに我独り立ち 遠き君を想ふ
そよ風は我が愛の 想ひでもたらしぬ
夕日山に沈めば 遠き君を想ふ

2月11日以降も、旧府立第二高女、現東京都立竹早高等学校同窓会長として母校の卒業式での祝辞、国際ソロプチミストの会合、大学生への講演、幼稚部の卒園式や大学の卒業記念パーティーでのお話、そして大学卒業式・入学式への臨席、法人役員会への出席と、毎週のように学内外にわたって精力的な活動を続けておられます。

[>前のページへ戻る](#)